

# 伝統的焼畑農業木庭作の 再生活動内容について

ツシマヤマネコ木庭作利用実行委員会  
日本大学生物資源科学部系長研究室

## 伝統的な焼畑農業“木庭作”の復活・再生

- 対馬では木庭作と呼ばれる焼畑農業が行われてきたが40年程前に失われた。おおよそ60代以上の住民は家族での木庭作実施経験があるが、その記憶は薄れつつある。
- 日本大学系長研究室では2011年度より山際利用推進によるヤマネコ保全、獣害対策、住民管理、都市との交流促進の重要性から、地域住民の方々と協力して木庭作の復活と持続的利用方法を模索している。一部資金は対馬市やトヨタ財団の支援による。
- 現在は、ツシマヤマネコ木庭作利用実行委員会が中心組織となり、日本大学系長研究室、ツシマヤマネコ共生農業実行委員会と連携して活動し、また、対馬野生生物保護センターや対馬市の支援を受け活動している。

# 木庭作復活の現代的な意味とは？

- 対馬伝統の木庭作の記憶が失われつつあり、文化の継承が求められる。
- 蕎麦等を育てる木庭作環境は、ツシマヤマネコの餌となるネズミ類などが好む環境であり、ツシマヤマネコの良い餌場となる。
- 木庭作を行い人の出入りが少なくなった里山に人が入ることで、荒れている里山問題対策になる。また里地に接する、山際斜面地の有効活用でシカ・イノシシの里地での食害等を抑制できる可能性がある。
- 焼畑が、環境にやさしい農業や山林利用法として全国的に見直されている。
- これらから、木庭作を対馬の新たな魅力として育て、持続的なものにしていくことに意味がある。



←伐採前（冬）



伐採後（夏）→

対馬市（豊田氏）の協力により伐採

# 木庭作地でのこれまでの活動

## 【志多留の木庭作地】

- 大平氏のご厚意により場所を決定
- ヤマネコ保全策、山際利用での獣害対策、歴史文化継承、地域活性化、志多留象徴として、地区在住の大平氏・原田氏・神宮氏・国分氏等と日大の連携した木庭作の復活と持続的利用方法の模索
- 2011年～40年ぶりの木庭作実施
- 国分氏よりインターン学生向け木庭作講座実施
- 2014年～新体制による地区を越えた活動に



志多留  
木庭作地



# 年間活動例

実施日	実施内容	備考
6月、8月頃	・ 草刈	
8/30 (2018年度は 8/29に実施)	・ 火入れ ・ 耕起 ・ 撒種	・ 均等になるよう昔ならではの蒔き方で種をまき、その後、鳥の影響を考慮してパリコミ実施
11/7	・ ソバモノイエ製作 ・ 収穫 ・ 乾燥	・ 蕎麦を干すためのソバモノイエを伝統工法で製作 ・ 天日乾燥を行う
11/26・27	・ 脱穀 ・ 風選	・ 唐箕を使って二種類の種とその他に分類
1/17	・ 製粉 ・ そば打ちイベント	・ 小型製粉機などで製粉 ・ 地元の名人を講師に迎える

# 火入れ





2018年



2018年



2018年

# ソバの播種





2018年

# コバツパリ (パリコミ)



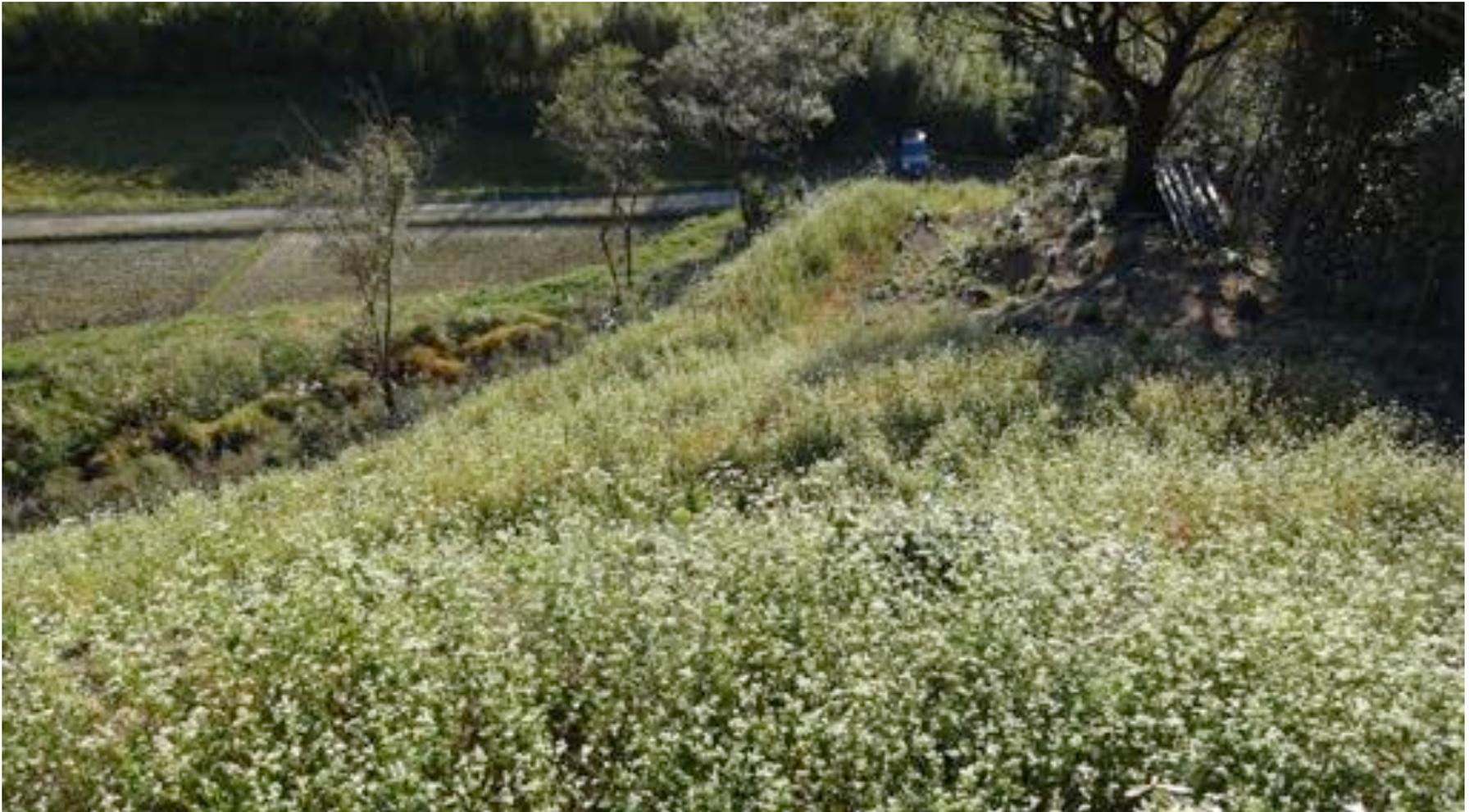


2018年

# 獣害防止柵の整備



# 志多留の木庭作ソバ開花



# ソバモノイエ製作・収穫・乾燥



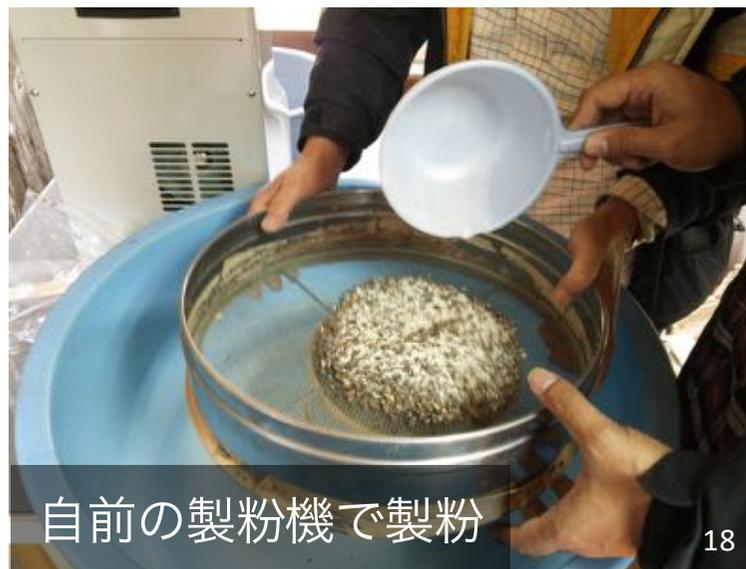
## ●収穫時の様子

種まき後2～3か月を目途に鎌を使いソバの収穫作業を行う。収穫したソバは束にして製作した約3mの高さの対馬伝統のソバモノイエに段組みで掛け乾燥させる。

# 脱穀・唐箕掛け・製粉



- 脱穀の様子  
イエで1～2週間乾燥させたのち脱穀作業に入る。  
乾燥させたそばの束の穂の部分をもの棒で叩き、穂から種を分離する。



# 収穫された木庭作ソバ



# 最後に

- 木庭作の伝統的農法や文化を確認・把握しつつ、新たな活動継続に向けて、収穫したソバの販売・イベント利用などを模索している。
- また2018年度からは、木庭作サポーター制度を開始し、企業サポーターにご協力・ご支援いただいている。
- 木庭作地での実施主体やサポーターが楽しめる試みの一つとして、また、獣害・ツシマヤマネコの生息環境を検証する一つの方法として、遠隔操作カメラ設置による仕組みづくりを行っている。

木庭作企業サポーター説明資料  
(2018/10/19)



## 【付録】 文献から紐解いた木庭作蕎麦の栽培手順

- 志多留・田ノ浜の伝承や、佐々木高明「日本の焼畑-その地域的比較研究-」、月川雅夫「対馬の四季-離島の風土と暮らし-」によると、過去の対馬での一般的な木庭作の方法は以下の手順で行われていたとされています。

### ①伐採（コバナギ）

- 伐採後、1ヶ月程度で枯れるので播種に間に合うようにナタで伐って枯らしておく。カセイを頼み、共同労働をおこなっていた。伐採木の用途としては大きい木は燃料用の薪と一部は傾斜の土が流れないように土留めに使用する。残った小枝は燃えやすいように細切れにする。

### ②防火帯作成（ホタルザラエ）

- 防火帯（ホタリ）を焼畑耕地の周囲に二間程度（3～4m）の幅で枝葉のないようにさらえる。

## 【付録】 文献から紐解いた木庭作蕎麦の栽培手順

### ③火入れ（コバヤキ）

- ・ 風のない日を選び、風の穏やかな早朝におこなう。焼畑耕地の広さによってカタヨリで4～8人でおこなう。防火帯に間隔をおいて人を配置し、用意が整うと、主が「唱え言」をいう。その後、松の松明に火をつけ、傾斜の一番上に火をつける。さらに上の方から、周りの部分にも火をつけていく。周囲が燃え尽きると木立に燃え移る恐れがなくなるので、一番下に火をつける。すると、一気に斜面に沿って燃え広がっていく。ホタリに立った人は木立に火が燃え移らないように注意し、燃え移る恐れがあれば小枝でたたいて消す。周りに燃え残りがあれば、クマデで中に入れて燃やす。1回目の火入れの後、焼け残った残材を集めて焼くコヤキをおこなっていた。

## 【付録】 文献から紐解いた木庭作蕎麦の栽培手順

### ④播種（コバツクリ）

- ・ 播種は火入れの翌日。耕地の下端に一直列に並び、種子を播種し、同時にクワで上から下へ覆土（コバツパル）しながら焼畑の斜面を登っていく。播種量は鳥類に食べられることもあるので、普通畑の二倍ほど播く。また、木庭作の規模は伐る前から播種量で面積を決める。栽培作物は土地の状態によって決まるが主にムギ、ソバ、アワなどである。対馬では初年目作物としてムギが広く栽培されていた。

### ⑤収穫・乾燥

- ・ 種まきより2～3か月を目途に鎌を使い根元からソバを刈り取る。収穫したソバは束にし、ソバモノイエ（穀物などを乾燥させる櫓）に段組みで掛け天日干しさせる。

## 【付録】 文献から紐解いた木庭作蕎麦の栽培手順

### ⑥脱穀・風選

- ・ イエで1～2週間乾燥させたのち脱穀作業に入る。乾燥させたそばの束の穂の部分をもの棒で叩き、穂から種を分離する（あやす）。唐箕（風を送り不純物の除去や種の分類をする木製の器械）を使い種の選別を行う。